

## 法王エジプト訪問

ローマ法王は、エジプト大統領アルシジャやコプト正教会教皇タワドロス2世の招待により、4月29日から30日の僅か27時間の日程でエジプトを訪問した。これは4月9日、「パルマ(棕櫚)の日」にエジプトのアレクサンドリアなどで、コプト教徒48人がテロの犠牲になった直後であり、緊張感が高まっていた。

訪問の目的は、「平和の使徒」として、平和の国エジプトを訪れ、イスラム教スンニ派の代表者イマム・アームド・アル・タイビ、コプト正教会司教キリロス・ウイリアム・サマーン、東方正教会コンスタンティノープル総主教バルソロメオス1世らとの会議に出席することで、そこで、平和のためには「対話」と「相互理解」が必要であることを確認した。法王には、1219年6月に聖フランチェスコが、当時エジプトのスルタン(イスラム王朝の君主)であったメルク・アル・カメルとダミエッタで会った光景が頭をかすめただろう。聖フランチェスコはイスラムを訪れ、彼らに話しかけ、相手を理解し、世界平和に寄与しようと行動したのだ。

エジプト空軍所有のスタジアムでミサが行われ、30万人が集った。これにもイスラム教の代表者、コプト正教会の教皇が招待されていた。ローマ法王は、貧に窮し、内戦に明け暮れる中東の国々、特にイエメンを名指しし、外交努力による諸問題の解決と、国連がさらなる役割を果たすことを訴えた。また、法王はコプト正教会の教皇タワドロス2世とエキュメニズムについて意見を交換した。コプト正教会はこれまで、他宗教者との結婚を禁じていたが、カソリック教徒との婚姻は容認するようになった。

エジプトからローマへの帰りの飛行機の中で、ある記者の、北朝鮮の行動が世界平和に暗雲をもたらしていることについてどう考えるか、との問いに、「私は各国の首脳と意見を交換している。それはいつも外交関係を通して行っている。そこにはノルウェーのような素晴らしい仲介者もいる。いろいろの問題があっても外交ルートを通して解決するしかない。そこには小さな政治的判断ではなく、大きな目を持った政治的判断が必要だ」と答えた。

## ミラノへ司牧の旅に

法王フランチェスコは3月25日朝7時10分にローマ・フィウミチーノを発ち、日帰りの司牧の旅に出掛けた。法王がミラノに足を踏み入れるのは就任以来初めてだ。ミラノのリナーテ空港に着き、近くのサラモーネ通りの低所得者用の市営アパートの家族を訪問。そこで病人と車椅子を使う身体障害者を抱擁し、慰めの言葉をかけた。そこからミラノ中心のドーモに行き、恒例のアンジェラス(お告げの祈り)を発表。そこで4,000人の神父、シスター、神学生に会った。そして、11時にサン・ヴィットーレの刑務所へ。そこには特に重い刑の囚人がいる。その収容者一人ひとりと握手をし、囚人と昼食をともにした。

キリスト教では、キリストの時代から「衣のないものには衣を与え」、「食のないものには食を与え」、「牢屋にいるものには声を掛け、慰め、改悛させる」のが信者の大きなつとめになっている。そのため、法王はローマにいる時にも時折刑務所を訪問している。その後法王はミラノから北へ20キロ離れたモンザに行き、公園で野外ミサを開き100万人が集まった。そこでは、社会の底辺に生きる人を快く迎え、接し、心を使うように説いた。

ミラノに戻り、サンシーロ競技場で、堅信志願者8万人と交歓した。歌と踊りで時を過ごし、その後参会者からの問いに答えていた。その中で、社会でも、学校でも「いじめ」を無くす

よう強調していた。

忙しいスケジュールの1日が終わり、ローマのフィウミチーノ空港に戻ったのは19時40分、それからヴァチカンへと戻っていった。翌3月26日の日曜日、法王はアンジェラスの中で、ミラノ訪問に関して、出会った神父、シスター、一般市民男女に、自分が歓迎され、我が家に帰ったようなリラックス感を持ったことについて、感謝の言葉を述べた。

法王の訪問を受けたサン・ヴィットーレの刑務所長グローリア・マンゼリは感激して、まともに話も出来ない程だった。「法王は本当に受刑者一人ひとり、全員と握手した。1,000の手とですよ。これに感激するのは当然だ」と述べていた。ミラノのサン・ヴィットーレ刑務所に法王が足を踏み入れたのは初めてだ。今回のローマ法王の訪問は食事時間を含んで2時間だった。囚人の中で誰が法王に直接会えるかという選択はなかった。法王を見たり、その話を聞くのは皆平等なのだ。

受刑者の中には法王に手紙を書いたものもいる。その一部を紹介しよう。

- (1) チャオ、フランチェスコ。敬称を付けず直接呼びかける無礼を先ず詫びる。おまえがサン・ヴィットーレの門をくぐって中に入った時から、おまえは我々のきょうだいだ。俺はここに入ってから暫く経つが、信仰はない。俺は罪を犯したことをおまえに告げる。今は愛が大事なことが分った。
- (2) 法王フランチェスコと話すことが出来れば、奇跡を起こしてくれるように頼みたい。それは自分の過去の誤りを赦してくれることであり、小さな時の純な子供に帰りたい。そこからまた人としての歩みを始めたい。
- (3) 親愛なるフランチェスコよ！ おまえは受刑者のために祈る時、性や人種や、特に宗教によって差を与えないだろう。我々のように祖国から離れたイスラム教徒にとってもおまえの祈りに感謝する。
- (4) チャオ、フランチェスコ！ おまえがこのサン・ヴィットーレに来るということを聞いた。なぜここに来るように決めたんだ。俺たちはおまえのベッドを第3棟の4階に用意した。シーツはあるからパジャマだけ持って来い。もしおまえがいびきをかくなら、予め教えてくれ。耳栓を用意するから。他には何も心配することはない。コーヒーもタバコも各種の Pastaもある。白っぽい洋服を着て来るのが良い。ここは埃がいっぱいあるからだ。以上。おまえを待っているよ。

## フランチェスコ、法王就任後満4年経過

3月13日、フランチェスコは法王就任以来4年経った。満80歳で、少し足が不自由のようだが、健康そのものだ。ヴァチカンの議会もうまく行っている。ただし、外側からは法王は共産主義者と見られており、内側では多くの人々が彼の内部改革に怯えているようだ。この4年法王は自分の信念に基づいて前進してきた。改革については次から次へと提案を続けている。家族に関するシノドス会議も2014年と2015年に開き、離婚者たちに教会の扉が開かれた。司牧の旅も続けている。特に、貧しい人々、社会の底辺の人々の救済に努めており、アラビア、アフリカからの難民事情を確かめようと、よく難民が到着するイタリア最南端のランペドゥーザ島や、2016年のシリア難民急増の際には、彼らのヨーロッパへの玄関口であるギリシャのレズボ島に行き、難民受け入れを提唱している。外交面では、ロシア正教のキリル総主教との面会、プロテスタント・ルター派の代表者と法王との500年振りの面会を果たすなど、エキュメニズム運動は一步、二歩と前進しているようだ。